

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

index

- 21世紀明けましておめでとうございます……1・2
- 理事会報告……2
- 海外ニュース……3
- アルプス越えドイツ・フランス・スイスを経て……4・5
- 新・パソコン外論考(其12)……6
- 出版文化史逍遙(52) 洋書の歴史雑記帳〔VII〕……7

2001

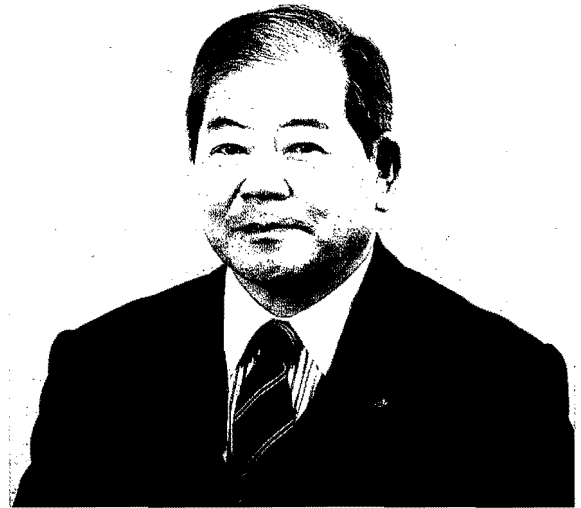
21世紀

明けましておめでとうございます

理事長 鈴木信夫

昨年2000年の世紀末、我々が若い頃学んだ19世紀の世紀末とはやはり様相が違いました。20世紀というのはこういう時代だったのかなとつくづく思わせられるような一年でございました。

当日本洋書協会と致しましては新体制になりまして二年目、一番「らしいこと」と申しますのは、ダイレクトリー委員会にたいへんご努力をいただきまして、7月にWEBサイトを開設し、ホームページ、ダイレクトリーからスタート致しました。その後のアクセス状況もきわめて順調と報告を受けております。二つ目が共同物流、4社という小さい規模でございますが、立ち上げを致しました。三つ目では、これも会員増強委員会他、理事の方々の大変なご努力を頂きまして会員の増強運動を展開致しました。今日も新しい会員の方にご参加頂いておりますけれども、退会した方々との差を埋めて、3社くらいの会員増という状況で新しい年を迎えることができております。四番め、2000年の東京国際ブックフェアにおいてオランダ年への協力、それと洋書パーゲン、恒例の行事でございますけれども、ブックフェアの定番となっております。これは事業委員会の皆さんに大変なご努力をいただきまして、立派に成功させることができました。更に、JAIPのパンフレットを新たに製作しフランクフルト、ロンドン、東京ブックフェアで配布して、広報活動の面で大きな成果が見られました。もうひとつ、消費税問題ですが、大蔵省としての見解というのがどうやら纏まり、問題の大きさから見て法律の改正をするとい



う規模にはならないけれども、現在の事象については大蔵省としてもよく認識しているので、次の立法の際によく考えて対応するということでございます。結論として言えば現状を認めるということと、その認めた中で何ができるか、単純には今ある外資の状況と同じことを日本の企業が行うということであれば、それについてはなんら異議を唱えるものではないという判断でございます。そこで、今年ということになる訳ですが、詳しくは五月の総会の時にお話するとに致します。取り敢えず一つだけ、新しい外資(Amazon)

の参入ということに関して言えば、皆様方がここで環境を整えてマーケットの上で新しい要素を取り入れて行く、従前の洋書業界というものの基本構造のところで行く、いくつかの根底的な問題を問うという一年になるでしょうから、そのことをどう考え、我々がこれからどうするかということを、今度の五月の総会では触れていかなければならないと思っております。同時に、それまでの間でございますけれども精々一生懸命やりまして、健全な業界の発展に繋がるように努力したいと思っております。今年のテーマと言えこれ以外に無いと思う訳でございます。また、今年の東京ブックフェアではイタリア年ということでありまして、イタリ

ア書房さんはじめ、関連の会員各社の皆様には大変ご苦勞をお掛けすることになると思います。それから、先ほど申し上げたJAIPWEBサイトのコンテンツの充実、また会員増強という、これは永遠のテーマになりますが、今年も協会としてお互い知恵と力を合わせて行えることがまだいくつかあるかと思ひます。年頭の挨拶としてはまだまだ厳しい現実を掴み取っていないような気もいたしますが、その中で今起きている事柄をしっかり見据えて取組む年に致したいと存じます。どうぞよろしくご協力くださいますようお願いいたします。

(2001年新年賀詞交換会 開会ご挨拶)

理事会報告

12月18日(月)

1. 以下の委員会報告を了承した。

- ・11月中の協会ホームページ・トップページへのアクセス数は684回であった。外部からのアクセスが予想以上に多い。トップページ掲載広告を積極的に募集して収入増を図りたい。

(ダイレクトリー委員会)

- ・1月号から新デザインを採用する。

(会報委員会)

- ・新年賀詞交換会の準備は滞りなく進行している。従来に比べて経費は低く抑えられる見込みである。72会コンペは来年100回を迎える。記念コンペを3月17日(土)を行うので多数の参加を期待している。

(文化厚生委員会)

- ・入会勧誘を再度会員各社に要請した結果、現在2～3社が入会を検討している。

(会員増強委員会)

2. 東京国際ブックフェア・イタリア年委員会の準備経過に関する事務局長の報告を了承した。

【主な事項】

- ・全体の構成についてはイタリア本国で検討中。
- ・日本からの図書出展スペースは18㎡程度。翻訳書、と原書を並べて展示する。
- ・イタリア側出展図書の集書、運搬、展示等の費用はイタリア側がすべて負担する。
- ・パビリオン内での即売は行わないが、出展社が各自のブースで販売することは自由である。
- ・イタリア文化会館がイタリア作家を20名程度

招聘し、講演会を開く。

- ・ブックフェア開会式後、イタリア側主催によりパビリオン内でオープングレセプションを行う。

3. 2001年度総会の役員改選に伴い、協会活動を一層機能的に行うために委員会の編成を見直す。

4. 新規約に基づいて設定した年会費が営業規模の実態に合わない事例が指摘されているので、適切な措置方を事務局に指示した。

5. 協会ロゴマークを新たに制定する準備を事務局に指示した。

お知らせ

ファックス番号が変わりました。

会員社名：(株)インターナレッジ・ブックス

新番号：03-3205-4652

変更日：2001年1月17日

※住所、電話番号に変更はありません。

事務所を移転しました。

会員名：(株)ハブネット

新住所：〒108-0023

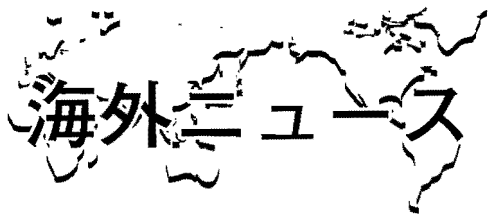
東京都港区芝浦4-2-8 1F

Tel：03-3455-5500

Fax：03-3455-3888

移転日：2001年1月29日(月)

※電話・Fax番号も変わりました。



◆ 世界の出版社が直面する電子出版の未来

昨年12月中旬、STM (International Association of Scientific, Technical and Medical Publishers) の主催で大手出版社90社が集った。これは同協会の第16回秋季会議で、London Online Conferenceに併せて開催されたもの。新世紀をひかえたこの会議では、電子商品対策としての戦略を討議するため、早朝から話し合いが行われた。科学系の著者の多くが、他の研究者に出し抜かれないためにも、自分の著作はできるだけ早く出版されることを望んでいるという報告をうけて、Ms. Amanda Mclean-Inglis (Blackwell Science) は電子出版オフィスを設置して編集・出版の業務フローを短縮すべきだと述べた。彼女は、権威があり、インパクトの高い雑誌に発表することの重要性を著者が認識しているのにもかかわらず、制作・編集・出版が遅れている現状が懸念されること、およびレビューアが「表面的で、不適格で、不正確」であることの弊害があることを報告した。奇妙なことであるが、新しいテクノロジー、プラットフォームおよびフォーマットを製作過程に導入することの煩雑さにもかかわらず、Ms. Mclean-Inglisは、「技術的な問題はつねに取り組まれている。本当に難しい問題はどちらかというと文化的なもので、編集者、著者、そしてレビューア者の行動を変えることがチャレンジにつながるのだ」と言う。

会議中にいくつかの意見が発表された。Mr. Daniel Smith (Elsevier) は、電子出版の問題点として、デジタル出版にフレキシビリティがあるとしても、「最終バージョンなどというものは存在しない（常に新しいバージョンが登場する）」と述べた。デジタル出版について懐疑的な意見としては、Mr. Cliff Morgan (John Wiley) が出したスタンダードについての意見と、Mr. David Inglis (British Library) が「論文の経済」と呼んだ意見である。これは、ユーザーが雑誌まるごとよりは自分のニーズに合った論文を

独自にミックスする方向へ進みつつある、現在の電子出版物市場で新たに進みつつある傾向について述べたものだ。

Mr. Anders Geertsen (Munksgaard) は編集工程をひとつひとつ説明しながら、サプライヤーとの相互関係に焦点をあて、冊子体出版後にオンライン版が出版された場合の問題点を示した。基本的なルール（「出版の方式を明確にすること」「サプライヤーをスクイズするなら迅速にすること」など）を挙げたうえで、Mr. Geertsenは彼の言うところの「逆方向」業務フローがもたらす利益を示した。つまり、原稿から直接ウェブが製作されると共に、最終的なデジタル・ファイルのスピン・オフ商品として印刷体も製作されるということである。

発表されたうちで最もポジティブな意見は、Mr. Tony Ross (Academic Press) が述べた。「デジタル・コンテンツは我々の目指すべき未来だ。技術はすでに整っている、コストは障害たりえない、何を迷うことがあるだろう」

様々な意見がかわされたが、大多数の発言に共通しているのは電子出版が避けられないということだ。Mr. Johannes Velterop は、出版者は今後出版からサービスへと重心を移してゆかねばならないだろうという意見を表明した。出版社は互いに、論文の一章から「スーパー」もしくは「ヴァーチャル」雑誌にいたるまで、広範囲な商品を「きめこまかく」扱ってゆく必要に迫られるだろうということだ。彼によると、出版社にとっての共通のゴールは、「ユーザーが包括的な知識を得ることをサポートすること」だという。

会議録はSTMウェブサイト (<http://www.stm-assoc.org>) 上に掲載されている。

Publishers Weekly/January 1, 2001

告 知

2001年度定時総会は以下のとおり開催されます。

記

日 時：2001年5月16日（水）

会 場：未 定（都内）

※本年は役員改選があります。詳細は追って通知します。

〔事務局〕

暮れから新年にかけての年中行事－忘年会、NHK紅白歌合戦、初詣、新年の挨拶など、から離れて、一生に一度くらいは全く新しい経験をしてみたくなるものだ。

今年は世紀の変わり目という百年に一度の機会でもあり、同僚の掛川富康教授とレンタカーでドイツ・フランス・スイス・イタリアを22日間で回るDIFS計画を立てた。学生も含め10人が参加し、7人乗りの乗用車2台で行くことにした。5人乗りの普通乗用車では荷物を積めるゆとりがないからだ。

フランクフルト空港で乗り換え、シュットガルト空港で降り、その後はダウンタウンの鉄道駅(Bahnhof)まで地下鉄で20分ほど行き、そこから列車に乗り換え、1時間ばかり離れたチュービンゲンに6日間滞在することになる。私は都合で1日遅れて一行に加わったので、海外一人旅の緊張感を覚えると同時に、行き道を親切に教えてくれる地元の人たちの親切心、偶然の出会いの楽しさなどを肌で感ずることができた。また、現地では英語によるコミュニケーションが役立たないことも多く経験した。EC諸国がアメリカと日本のほか第3の経済圏を形成しつつある現在、ドイツ語、フランス語、イタリア語の3カ国語は、道を聞いてわかるだけの最低コミュニケーションでできることが望ましかった。

チュービンゲンは学問の町である。チュービンゲン大学は学生数約2万人、創立1477年で、一流の図書館や書店があること、また多くの学者を輩出してきたことで知られている。この大学に4年ばかり留学された掛川教授の計らいで、大学食堂での栄養満点の学生用の定食を食べたり、Adelheid Iguchi氏による蔵書三百万冊以上を持つ大学図書館のご説明を伺ったり、また、同大学の著名な教授、Hubert Canik教授、Hilgard Canik教授、Rainhard Breymayer教授にお会いしたり、さらにバーゼル(Basel)で、Karl Barthを研究されているHans-Anton Drews博士と時間を忘れて意見を交わしたりなどよい情報交換ができた。

日本にいとドイツとフランスを対立的に見がちであるが、フランスからチュービンゲン大学などに長期

滞在して学問の神髄を窮め、帰国後著名になったフランスの学者が少なくないそうだ。

われわれ一行はチュービンゲン郊外の山頂にある威風堂々としたホーエンツォレルン城(Hohenzollern Schloss)などを訪れたあと、ブドウ畑の間を通りながら、フランス領のアルザス地方にあるコルマル(Colmar)へ進んだが、ドイツと違って色彩豊かな陽気な雰囲気を3日間にわたって体験した。ウンターリンデン(Unterlinden)美術館は町の中心部にある大聖堂近くにあり、不朽の名画を観賞できた。そのあと、バーゼルに1泊して、大晦日にはアルプス北側の登り口に当たるブリーク(Brig)で年越しをする。

アルプス越え

ードイツ・フランス・スイスを経て

チュービンゲン大学の荘厳な教会でのクリスマスイヴの礼拝時と異なり、滞在したホテルでの年越しディナー(Sylvester Dinner)は午後7時から12時まで続く豪華な食事にリクエスト音楽が伴う陽気なものだった。地元の人たちは歌の合間にクラシックな踊りを楽しんでいた。私もかつてアメリカ留学途上太平洋横断客船(ocean-liner)で洋上ダンスを楽しんだことを思い出し、掛川教授と

ついその仲間に加わった。12時を打つと、互いに抱き合ったりして新世紀の到来を祝った。その後の30分間、ブリークの町は花火の打ち上げで賑やかだった。

冬のアルプス越えは吹雪のために道路が閉鎖されることが少なくない。しかし、幸いなことに正月の空は晴れ渡り、白銀を抱くアルプスの山々がくっきりと見え、道路の状況もよかった。「白銀のアルプス越えて お正月」など車中で俳句作りも楽しんだ。

車はアルプス山下の美しいマジョルカ湖にそってベルガモ(Bergamo)へと進んだ。高台の城壁内にあるSan Lorenzoホテルを探すのは骨が折れたが、道行く人々の親切な道案内と掛川教授の優れたイタリア語の伝達能力、さらに積極的な「聞きまくり」によって無事にたどり着くことができた。狭い坂道で何度かUターンしたので、私の運転する車のクラッチから臭い黒煙を吹き出すまでになっていた。オートマ車に慣れてしまっていたせいで、重量を積んだマニュアル車の「エンスト」を避けるため、アクセルをふかしすぎた

せいだと思う。その後、20歳代の後半に、イギリスでマニュアル車の運転免許を取った時のことを思い浮かべ、ハンドブレーキの使い方に慣れ始め、クラッチの働きは正常に戻った。

ベルガモではカラレ (Carrare) 美術館を訪れ、古典的名画とその保存の良さに感動した。また、ミラノまで列車で1時間で行けるので、2度訪れて、アンブロジア (Ambrosia) 図書館やブレラ (Brera) 美術館などを見て回った。ルネッサンス期に生み出されたこれらの美術・彫刻品は一つ一つ素晴らしいものであるが、さらに印象深かったのは頑丈な石作りの建造物である。壁面には多くの人物像が浮き彫り彫刻され、列柱と梁のつなぎ目にはバイオリンの突端をイメージさせる渦巻き状の施しに注目した。掛川教授は「ここはドイツ的な素朴さと違って、アルスの世界です」とコメントがあったが、町並みは豊かな感性を髣髴させるものだった。また、イタリアの男性も女性もハットするような魅力的な人たちが少なくないことが印象的だった。

最終到着点はベルガモから300キロほど離れたフレンツェ (Firenze) であるが、途中クレモナ (Cremona) に立ち寄り、掛川教授のご紹介で、こちらで19年間バンオリン作りに専念されておられる Toshiyuki Matsushita 氏にお会いし、同氏のスタジオで直接お話を伺った。樅の木と楓が素材だそうであるが、良質のものはこの土地でしか取れないそうだ。東京で個展を時折開かれるそうであるが、海外で一流の仕事をされている日本人に大いに期待したいものである。

フレンツェでは「フレンツェの母」と呼ばれている高台、フィエゾレ (Fiesole) に泊まった。高台から眺めるフィレンツェの町は夜景もすばらしい。10年前にクライニーの丘から眺めたアイルランドの首都ダブリンの町にどこか似たところを感じたがこちらのほうが色彩豊かのように思う。フィレンツェはルネッサンスが開花した都だけあって、至るところにミケララジェロなどの天才が残した古典的作品や建造物が残っている。なかでも巨大で色彩豊かなドゥオモ (Duomo) と呼ばれる大聖堂、またその南側にそびえる84.7メートルのジョットの鐘楼 (Companile di Giotto) は特に注目を引く。どちらも美しい色大理石を使っており、白、緑、ピンクの外壁が観る人を飽きさせない。また、ダヴィンチの作として有名なダビデの肖像などがあるア

カデミアガレリー (Accademia Gallery) などの美術館だけでなく、ダンテの生家を訪れたり、アルノ (Arno) 川に沿って散歩したりするうちに、古代、中世、現在の歴史的な文明のつながりを覚えた。

今回の旅行は22日間という制約の中で、多くを観て回るためにレンタカーでのドライブという形となったが、4カ国を回って思ったのは、英語が如何に独伊伊の言語から離れてしまっているかということだった。ミラノへ行く列車の中で、菅田茂昭著「現代イタリア語入門」(大学書林) を掛川教授から借りて読んだが、イタリア語はつづり字と発音がほぼ一致しており、しかも振り仮名通り言うとそのまま通じるのである。英語の場合は、カタカナを振ることを伝統的に排除しようとする傾向が強いが、英語学者がカタカナの代わりに発音記号を活用しているかと言えば必ずしもそうではない。私の接したイタリア人は少数であるが、英語をつづり字通り言っていた。bus は「バス」であり、minutes は「ミニユッツ」であった。

イタリア人はFiesoleの地名を「フィエゾレ」のように発音する。英語式に言うと、ieのつながりは「イー」か「アイ」であり、また、soleは一般に語末のeを発音しないため、「ソウル」のようになる。また語末のeを発音しようとする、決して「エ」にならず、「イー」のようになる。さらに母音の後のlと母音の前のlでは音質が異なるので、前者の場合は「ウ」に近く発音することになる。イタリア語は母音が日本語のアイウエオと同じで、子音の後にはほとんど母音がつくいわゆる開節構造だ。日本は東回りの文化遺産を受け継ぎ、英語は西回りの文化遺産を受け継いでいると仮定すると、ユーラシア大陸の極西に位置する英語圏は最も地域的変化を受けた言葉ということになる。日本は東西文化遺産の遭遇点と捉えれば、われわれの先達が漢文を研究したように、英語に深く影響を及ぼしたラテン語とその継起的な発展として、現代のフランス語、スペイン語、イタリア語を学ぶことは今世紀の課題のように思う。若い世代だけでなく、「六十の手習い」として、音声的に英語よりはるかにやさしいヨーロッパ諸言語により多くの人が興味を持たれること望みたい。

(茨城キリスト教大学教授)

新・パソコン外論考 (其12)

宇田川一彦

◆ That old feeling./焼け木杭に火が……。

<子曰、>回也不改其樂、賢哉回也、

< The Master said, > 'But Hui does not allow this to affect his joy. How admirable Hui is !'

(論語／雍也・Confucius ; The Analects / Book VI)

【超拙意訳；<先生は言われた。>「えらいね、顔回は、楽しみとするもの（学ぶこと）を、やめずに貫いているよ、本当に顔回はえらいよ！】

【自註；孔子の弟子顔回に対する賞賛の言です。粗末な食事、狭い路地の住居、普通の人であればその憂いに堪えられないだろうに、顔回は違ったのです】

★パソコン英語余談

先日、寝転がって本棚の奥の奥にありました新書を読んでいた。と、ある頁で眼から鱗が落ち、本を落としましたね。それは、先々号で紹介しました国名の2字略語に関して謎が解けたからです。たいへん示唆に富んだ1冊の本は、「街角のイギリス英語」（大村善勇著・丸善ライブラリー・1993年刊）の104頁でした。

『でエッ？が【ch】=Switzerlandでした』のくだり。

Confédération Helvetiqueがスイス連邦のフランス語読みだそうです。だから、【ch】となるわけです。

さっそく、Random House英日辞典（小学館刊）を引きました。Helvetiaとは、スイスのラテン名。Helveticは、スイス新教徒、ツウイングリ派。Julius Caesar時代にヘルベチアに住んでいた古代ケルト人、云々と続きます。うん、そういえば、いまでも編集印刷用語では何気なく、英文字を指定するときにHelvetica Boldや、Regularとか使っていましたのに……。

★Internet関係のパソコン英語**** (8)

休み明けに、mail boxを覗きびっくりしました。

e-mailのマナーは、「文書は簡潔」、「テキストファイルのみ」で送ること。といていたにも関わらず、膨大な添付ファイルをくっつけて送った友人が、なんと3人もいらっちゃった、のに驚愕しました。

e-mailをdownloadするのに、なんと55分。これではNTT東日本（あるいは一分の、第三通信業者）のみが、もうかるシステムなんだなあ、といたく実感。これがIT革命の現実なのです。

まあ、mail boxにアクセスした時に、見たこともない膨大なバイト数が出ていましたので、悪い予感がしたのですが、取り敢えず取り出さないことには、ゴミ箱に

も捨てられません。で、1通取り出すのに55分。当日は、連絡が8通きていましたので、合計72分。（筆者のPCは古いので、CPUのパワーも現行の物と比較すると数十分の一、通信ソフトも画像系は扱えない）。本当に、貰っても見えない半角英数字の画面を、55分眺めて、ひたすらリターンキーを叩く無益の作業に疲れました。

再度、e-mailのマナーは、「文章は簡潔」、「テキストファイルのみ」で送ること。とはいっても、いろいろと我が子の写真も送りたい人がいますので……。

で、今回はe-mailに添付されるファイルには、次のようなextension＝拡張子（これは、——. XXXという様にXXXの部分、3文字が多い）があります。

【avi, bmp, clp, doc, eps, exe, gif, jpg, lwp, mov, mp3, pct, rle, rmi, tif, tga, txt, wav, wmf】

これらのほとんどが、そのapplication softwareを作成したメーカーの独断で付けたextensionですので、分かり兼ねるの也有ります。が、その内の分かるものをいくつか紹介してみたいと思います。

【txt】= TeXt file = テキストファイルです。e-mailで通常のやり取りするのが、この形式のものです。表や罫線などと一緒に文章を送付する事はできません。

【doc】= DOcument file = 文章ファイルの意味です。これは、例のMicrosoft Wordで作成したファイルにつく物です。

【rtf】= Rich Text Format = 文字修飾情報付テキスト形式。Microsoft社の規定したもの。書体や下線など文字飾りなどの情報をタグとして付けているものです。

【xls】= Microsoft Excelのファイルにつくextension。

【pdf】= Adobe社のファイルにつくもの。グラフィック系のファイルです。この他に、グラフィック系のファイルとしては【bmp, gif, jpg, pct, wmf】があります。

【wav】= WAVeform Format = Win用のデジタル音声形式。

他にmp3, midi = musical instrument digital interface。

【avi】= Audio Video Interleaved = Win用ビデオファイル形式。アニメーション関係のファイルです。他に、画像圧縮のgif = Graphic Interchange Format、映像圧縮規格、mpg = Moveing Picture expert Groupがあります。

で、e-mail上で要注意（ヴァイラス対策）のファイル。

【exe】= EXEcute file = 実行形式プログラムファイル。

意味不明のmailが届いたときに、まず拡張子を見て、【.exe】であれば、疑い、開けずにgarbage-boxに捨てることです。以下次号。（乞御期待）

洋書の歴史雑記帳〔Ⅶ〕 吉利支丹と洋書(7)

鈴木 陽 二

◆南蛮地図(2) 世界地図と信長

鉄砲伝来以降多くのポルトガル貿易商や宣教師が来日し、行基図を持ち帰って参照したこと、逆に彼らによってヨーロッパ製地図がもたらされたことは、今まで述べてきた。日本にいつからヨーロッパ製地図が入ってきたのか不明であるが、織田信長の手元には1580(天正8年)に地球儀が、1581(天正9年)に地図があったと外国の記録に残されているという(海野一隆『地図の文化史』)。フロイス『日本史』と『耶穌会日本通信』によれば、信長は宣教師オルガンチーノ謁見のうちに、ポルトガルから日本への旅程を地球儀によって説明させている。これは信長が所持していた地球儀によるのか、あるいはオルガンチーノが持参したものなのか不明であるが(学者により異説がある)、いずれにしても、この年には日本に世界地図(地球儀)が存在していたということになる。ともあれ、天正遣欧使節がオルテリウスの地図を将来する以前から、宣教師は布教の許可を得るため、キリシタン大名などに世界地図や地球儀を献上したことは十分に想定できるようである(織田武雄『地図の歴史』)。

信長がオルガンチーノに教義や世界の様子などを聞いた年の1580(天正8年)といえは勅によって泥沼のような本願寺との戦も終焉し、天下布武を掲げる信長の全盛期であった。前年の天正7年には安土城の天守閣が一応の竣工を見(完成は天正9年)、町は楽市楽座で繁栄していた。その天守閣の上楼二層はセビリヤの万博に出品のため原寸大で復元され、現在は「安土文芸の郷」にある「信長の館」で観覧できるが、訪れる人はその豪壮・華麗な造りにただ驚嘆するばかりで、神になろうとした在りし日の信長の姿を偲ぶことができる。安土城址は発掘と整備が進められており、標高199メートルの安土山の頂まで、頭上にかぶさるように急な石段が曲がりくねってせりあがり、穴太(あう)積み荒い石垣が幾層にも重なり合って登る人を威圧する。石段の途中には、山を削り石垣を組んだ配下の武将の屋敷跡が随所にあって、秀吉や家康、前田利家、丹羽長秀、森蘭丸など戦国日本を彩った勇将たちの名が見られる。当時安土山は琵琶湖に突き出た半島であったが、前面東側には入江を埋め立てた安土の町並みが広がり、向背の西側は琵琶湖がその美し

い景観を見せていたことであろう。今は四方を見はるかす天守閣もなく、山麓も既に埋め立てられて肥沃な田野に囲まれた静かな安土城址で、天下布武も「夢幻(ゆめまぼろし)」の感慨を覚えさせる。安土城は明智光秀の反乱で焼失し、その後近江43万石を領した豊臣秀次が近くに八幡城を築き、町造りを行って安土の商人や職人を呼び寄せたときに安土の町の繁栄が終わった。この近江八幡も楽市楽座で栄え、近くの五個荘と共に近江商人発祥の故地で、蚊帳などで財を成した「西川」(西川産業の前身)に代表される豪商が生まれた。今でも八幡瓦に出格子の家並みに江戸の情趣を残す静かな町であるが、明治末期に来日したアメリカの伝導者で建築家W. M. ヴォーリスが設立したキリスト教伝導団の近江兄弟社(メンソレータムで有名)の洋館もいくつか見られ、明治のロマンも味わえる古格の町である。

信長はキリシタンを庇護し、安土に地所を与えてセミナリオ(神学校)が開校されたことは以前述べたが、安土の町並みのはずれの所「セミナリオ公園」に立つと、安土山が指呼の間に望まれ、湖を渡り、安土山から吹きおろす風に黒衣の裾をひるがえしながら行き交った伴天連たちの姿が、白昼夢のように脳裏に浮かんでくる。

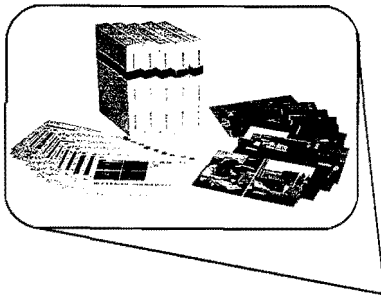
16～17世紀のヨーロッパ製日本地図をひとわり紹介するには紙数を要するので踏み込まないが、ひとつふたつ述べておきたい。大阪の「南蛮文化館」はキリシタン関係の遺品・美術品などを収蔵しているが、同館所蔵の『テイセラ日本図』は日本専図として画期的なもので、よく関連の文献や展示会に掲示される。この地図はスペイン王室の地図製作者ルイス・テイセラにより製作され、オルテリウス『地球の舞台』の1595年版に収録された。それまでの日本図になかった地名が多く表示されているなど、新しい情報源があったと見られ、例えば織田武雄先生は行基図以外のものと優れた日本製地図の存在をうかがわせるとし(『古地図の博物誌』)、あるいはイエズス会による新しい日本図があったと見る説もある(岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』)。ともあれ、この地図はそれ以降の日本地図作成に影響を与えた。

(元丸善・本の図書館長)

日本語教育用

写真パネルバンク CD-ROM

「写真パネルバンク」の全5シリーズ、合計パネル数643枚が
1枚のCD-ROMになりました。充実した検索機能と音声を加え
漢字、かな、ローマ字、英語の4モード対応で
学習者のレベルに合った学習が可能になります！



CD-ROM 内容構成

- I 衣食住と道具シリーズ (107枚)
- II 社会生活シリーズ (156枚)
- III 自然と余暇シリーズ (108枚)
- IV 行事シリーズ (125枚)
- V 日常生活シリーズ (147枚)

このCD-ROMは、既刊の日本語教育用「写真パネルバンク」
I~Vシリーズに収められているパネル写真（全643枚）の
日本の事物や行事、日本人の行動等を写真で表したパネルを手軽に検索することができます。
既刊の「写真パネルバンク」シリーズと併せてご活用下さい。

ISBN4-88996-053-8 本体価格¥18,000

総発売元

日本出版貿易株式会社

東京都千代田区猿樂町1-2-1
TEL:03-3292-3755 FAX:03-3292-8766